



TITLE:

四國佐川盆地産アンモナイトに就きて

AUTHOR(S):

清水, 三郎

CITATION:

清水, 三郎. 四國佐川盆地産アンモナイトに就きて. 地球 1928, 9(1): 36-41

ISSUE DATE:

1928-01-01

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/183382>

RIGHT:

四國佐川盆地産アンモナイトに就きて

清水 三郎

江原眞伍學士は最近左記の論文

S. Yehara: Faunal and Stratigraphical Study of the Sakawa Basin, Shikoku, Japanese Jour. Geol. Geog., Vol. V, No. 1-2, 1923-1927.

を公表され本邦中生層研究に對する一新説を提唱された是の主要の一點は在來ジュラ紀と考へられて居た佐川盆地の鳥ノ巢石灰岩中に上部三疊紀に該當する部分の存在して居ると云ふ事である。

此の様な結論に到達された理由は嘗て M. Neumayr が佐川盆地耳飛田^{ミトダ}産のアンモナイトを歐洲ジュラ紀産の種類に比較して Harpoceras japonicum Neumayr とされた原文並原圖に依つて江原學士は該種が全く新屬に屬す可きものであらうと考へられたが兎に角チモールの上部三疊紀産の

Trachyleurospidites malayicus involtus Welter

に比較され假りに Trachyleurospidites 屬に屬せしむ可きもので一方ヒマラヤの中部三疊紀より記載されて居る Ceratites thullieri Oppel にも類似して居ると鑑定された結果此等外國の類似種特にチモール種の指示する地質時代より鳥ノ巢石灰岩の時代に關し一新説を出された次第である。

此記事は吾人に誠に不可思議な感を與へた特に余の一驚を喫した事柄は江原學士のアンモナイトの

鑑定であつて余は全然同氏と意見を異にする。

余の見る所にては鳥ノ巢石灰岩に上部三疊紀層の含まれて居ると云ふ一新説は遺憾ながら右の材料のみにては今日信する事が出来ないものである。

余は不幸にして Neumayr 氏の記載された原品を検する事も出来ず又生憎それと同種の標品を何等持合せて居ないので原種を判断するに多少不便を感じたが Neumayr 氏の原文並原圖より主要なる特徴を可成よく窺知する事が出来たので茲所謂 Harpoceras japonicum に對する余の意見を述べて江原學士の高教を仰がんと欲するのである。

Neumayr 氏が掲げて居る Harpoceras japonicum の圖を検するに明に一本の keel を備えて居る又縫合線は bipolar で serration 可成複雑し auxiliary の發達比較的著しく三疊紀型にあらずして明にジュラ及白堊紀型の縫合線で R. Wedekind 氏の分類に依る Neocomonoidea に屬して居る事が容易に判断出来る特に siphonal lobe 短かく lobe は triaenid や 1st. lateral saddle が異常發達を示し external saddle より可成丈高き事並に分殻の形態が細長き橢圓形で表面に彎曲せる肋線を備えて居る事等より觀ても Neumayr 氏が考察した如く在來唱へられた廣義の Harpoceras 屬(今日は種々の屬に分類されて居る)に屬すべき事は明かであつて Neumayr 氏が比較して居る歐洲ジュラ紀産の Sonnina sowerbyi Mill 及 Harpoceras (Grammoceras) radicans Rein 等に成程類似して居るが縫合線は一層ジュラ紀産の Chartonia 屬に近似して居つて耳飛田種がジュラ紀種である事は疑ふ余地が無く江原學士の同定された Trachyleurosapidites 屬及比較された Ceratites 屬とは

著しき相異のあるものである事は異論がない。

一體 Trachypleuroaspidites 屬は C. Diener 氏が創設した Arpadites 屬の一亞屬であつて

Ditmarites 屬に近似し表面の裝飾が Trachyceras 屬に類似したもので在來ヒマラヤ及印度支那の上部三疊紀ノック階(Noric)より僅かに七種報告されて居る、而して屬の著しき特徴は介殼の兩腹縁に各一本の keel を備え縫合線は Monopolar で serration 比較的簡單で Ceratites の面影を明に示して居る又 lobe は明かに Prionid で auxiliary の發達極めて鈍く Wedekind 氏の Mesammonidea に屬すべきものである。今左に佐川盆地耳飛田種と Trachypleuroaspidites 屬の相異を一見して知れる様に表示しよう。

耳飛田種	<u>Trachypleuroaspidites</u>	
keel 1	2	
縫合線 複雑	比較的簡單	
bipolar	monopolar	
lobe 細し	著しく太し	
lst. lateral lobe triaenid	prionid	
saddle 基部に巾狭く 頂部に廣し	基部に巾廣く 頂部に狭し	
auxiliary 發達比較的 著し	發達極めて鈍 し	

又江原學士は耳飛田種がヒマラヤ及歐洲中部三疊紀アニシク(Anisic)産の Ceratites thuillei Oppel と類似して居る様に考へられて居つて後者には keel が欠如して居るを見て居られるが C. thuillei の何れの記載及圖版を觀ても明瞭に一本の keel を備へて居り又耳飛田種とは著しく相異し縫合線は monopolar で serration 簡單で然も lobe は prionid であつて明かに

Wedekind 氏の Mesosamm noidea に屬すべきものである。C. thuilleri は歐洲ヒマラヤ北米カリホルニアのアニシク階及ラディニク階より産する。

C. trinodosus Moj. と酷似して居つて後者を基型として居る Ceratites の一亞屬である Paraceratites 屬に屬して居る。C. (P.) trinodosus に類似して居るものが仙臺の東北方の利府三疊紀層より産出した。

上述の如く耳飛田種を似ても似つかぬ屬にむりやりに押し込められた理由はアンモナイトの鑑定上最も主要なる縫合線並 keel の意義を忘却し唯全然別系統に屬して居る別屬の偶然に多少類似して居るほんの表面の裝飾のみを比べ合せた結果である事は江原學士の論文より洞察する事が出来る。江原學士は一方に於て耳飛田種が三疊紀の新屬に屬す可きものかも知れないと考へられて居るが成程ジュラ紀種を前記三疊紀の Trachylepterospindites 屬及 Paraceratites 屬等に比較すればその相異の著しきに氣付かれるは當然で又三疊紀の既知の何れの屬にも該當しない事も勿論である。

若し亦耳飛田種がジュラ紀の新屬であるかも知れないと考へんとするものあらば余は遺憾ながら今日その可否を決定するに躊躇せざるを得ない何となれば凡そアンモナイト中でジュラ紀のものが今日迄最も多く研究され分類も著しく進歩して居るに反し本邦に於てはジュラ紀産アンモナイトの産出極めて乏しく殊に Harpoceras japonicum の標品無く、剩え參考書が不足せる爲め耳飛田種の詳細なる研究を進め所屬を確定する事は到底不可能な事である。

要するに耳飛田種は明確にジュラ紀種である事に就ては余は Neumayr 氏に賛意を表するのであつ

て今後の詳細なる研究の進む迄 Neumayr 氏に従ひ Harpoceras japonicum として取扱ふ可きが至當であるを信ず。

附記

Arpadites sakawanus Mojs. に就て

江原學士が Arpadites sakawanus として記載されて居る圖版は Mojsisovics 氏の原圖とは著しく相異して居り明かに別屬別種である。

Mojsisovics 氏の A. sakawanus に就ては今日迄議論多く Mojsisovics 氏自身も後に上部三疊紀産の Cyrtopleurites 屬或は Tibetites 屬に屬す可きものと考へられた然るに Diener 氏は該種は上部三疊紀の Bambanagites 屬か或はジュラ紀の Oppelia 屬に屬すべしものであると見做され其後著はされた C. Diener : Fossilium Catalogus, I : Animalia, Cephlopoda triadica. 中に假し Arpadites 屬に入れられて居るが屬は不明であると記されて居る。 Mojsisovics 氏の原種は記載にある通り Trachyceras 及 Arpadites 屬の如く介殼の腹部中央に溝があつて其兩側即兩腹縁に各一本の keel を備へて居ると云ふ事である又同氏の圖版を見るに介殼表面に可成太く顯著なる S 字形の肋線を備え臍極めて狭く螺旋幅狭くして著しく高き事等の特徴より見るに Arpadites, Bambanagites, Oppelia 等の屬より寧ろ Mojsisovics 氏の云へる如く Cyrtopleurites 屬に近縁なるものと考へる然し該品の縫合線不明にて今日屬を限定するに不充分である故 A. sakawanus の原種を假し Cyrtopleurites? sakawana Mojs. として置く。

却説江原學士の A. sakawana と稱するは兩腹縁に各一列の serrate した keel があつて介殼の表面には Mojsisovics 氏の原種と著しく相異せる細き多數の S 字形の肋線が密に排列されて居り螺環扁平で幅狭くして著しく高き事等の特徴は江原學士の同定された様に或は Arpadites 屬に屬すべきものかも知れない然し縫合線及臍の大きさ等に就き何等の記載も亦圖版にも示されて居らず全然不明であるから Arpadites 屬と限定するには幾分の疑ひが存するのである。

江原學士は Mojsisovics 氏及 Diener 氏が Arpadites sakawana (原種) の所屬に就ての意見を掲げながら原種を尙 Arpadites 屬と認められし理由が不明である、しかも Mojsisovics 氏の原種と著しく相異せる同學士の標品を共に同種と認め Arpadites sakawana と名けたる理由も了解に苦しむ。余は江原學士の標品は種は勿論屬すら限定するには余りの不完全なるものと認めるので Arpadites sp. とするが最適當であると信ずるのである。以上 Arpadites sakawana に對する余の意見を述べ重ねて江原學士の御示教を希ふ次第である。

率直に記述したれば或は禮を失したる暴言あらむも御寛容を乞ふ。(昭和二年十月十八日)